

# 中国大陸における大学日本語専攻用教材開発研究

曹 大峰\*

## 摘要

本文以中國（大陸）高校日語專業的教材開發為研究主題，簡要回顧了中國（大陸）日語教材編寫和使用的歷史，重點考察了上世紀70年代以來高校日語教材建設的狀況和特徵，並結合近年來作者主持的教材研發項目的事例，論述了面向日本以外國家和地區日語教育的教材研發理念、方法和課題。

關鍵詞：日語教育，教材研發，（大陸）高校，歷史與課題，理念與方法

---

\* 北京外國語大學北京日本學研究センター 教授

# 中国大陸における大学日本語専攻用教材開発研究

曹 大峰

## 1. はじめに

海外の日本語教育では、学習環境と教師構成<sup>1</sup>の状況により、教科書の役割は大きい。

国際交流基金が実施した『海外日本語教育機関調査』で日本語教育上の問題点として最も多くの機関が回答したのは「適切な教材の不足」であり、2003年以來毎回の調査で連続して目立つ問題点となった。このことから見れば、「適切な」日本語教材の開発とそのため  
の研究は、当面と今後に求められている重要な課題だと言えよう。

本稿では、この課題に関して中国の学習者を対象とする日本語教材作成とその研究をテーマにする。具体的には、中国大陸における大学日本語専攻用教材の編集と使用の歴史を簡単に振り返り 20 世紀 70 年代以來の状況と特徴を考察し、最近著者が関わった教材研究と教材開発の事例を踏まえて海外の日本語学習環境における教材開発の理念・方法と課題を論述する。

## 2. 日本語教材編集と使用の歴史

中国の日本語教育の歴史は、明の時代(1368年)に端を発するが、近代以降は清末から民国初期(1900年前後)、さらに 1930 年代に日本語学習のブームが訪れた<sup>2</sup>。この時期には多くの日本語教材が出版されていたが、最初はほとんど日本の教科書の翻訳や編訳されたものであった。その後、一部の日本人教習が自分たちの経験に基いて中国人学生のために編集したものや帰国した留学生が編集し翻訳し

---

<sup>1</sup> 非母語話者教師が多い

<sup>2</sup> 徐一平・篠崎摂子(2005)

たものもあった<sup>3</sup>が、1930年代以降は中国人の編集したものが多くなり、政府その他の機関でも日本語教科書の編纂が行われていた。近代科学図書館の調査（1940年）によると、当時の日本語教科書は一般学習書が32種、読本が58種、文法書が26種、会話書が29種で合計145種もあったという<sup>4</sup>。

このような日本語教材編纂の状況は、第二次大戦の終結とともに大きく衰退し、1949年の新中国成立から1972年の中日国交正常化までの20数年間に中国大陸で出版された日本語教科書は、『大学日本語一年級課本』（北京大学東方言語系編1959年）、『日語』（北京大学日語教研究室編第1冊～第3冊1963-1964年）、『科技日語自修読本』（陳信徳編1960年）、『新編科技日語自修読本』（同1964年）、『日語会話』（周潔如編1963年）、『中日貿易会話』（金鋒編1965年）の数種だけであった。

1970年代に入ると、文化大革命で停止された大学の学生募集が復活し、北京大学をはじめ一部の大学では日本語教育が再開したが、その後まもなく中日国交の正常化を迎え、日本語の授業を開設する大学や民間学校が急増し、日本語教材の編集も各大学で始まった。上海市大学教材『日語（日本語科用）』（1974-1976年）を初め、湖南大学の『基礎日語（理工科用）』（1973年）、吉林医科大学の『医用日語基礎』（1978年）、人民教育出版社の『日語（第二外語用）』（1979年）など30数種も出版され、ラジオ日本語講座も上海・北京・大連での放送開始とともに教材が出版された。

1980年代には、大学の日本語教材はさらに90種近く出版されるようになったが、上海外国語大学の『日語』（1980-1981年）をはじめ、北京大学の『基礎日語』（1981年）、復旦大学の『日語』（1983年）など日本語専攻用の教材ばかりではなく、理工科用の日本語教材も数多く出版された。また、小学校の日本語教科書は『大連市小

---

<sup>3</sup> 汪向荣（1991）

<sup>4</sup> 徐敏民（1996）

学使用教材『日語』(1989年)が出版され、中学と高校の日本語教科書も人民教育出版社から出版された。

1990年代には、急増する日本語教材の出版に対して、教育部推薦教材として大学の専攻用と非専攻用の日本語教科書が多種出版された<sup>5</sup>が、上海外国語大学の『新編日語』が日本語専攻で最も広く使用される日本語教科書のロングセラーとなった。一方、人民教育出版社と光村図書の協力で出版された『中日交流標準日本語』が、テレビ講座を通して大陸全土に広がり、最も販売冊数の多いベストセラーとなった。

21世紀に入って以来、大学用と小中学校用の日本語教科書は新世紀を迎えて相次いで新版を発表したが、新しい試みを凝らされたのは大学非専攻用『新大学日語』(高等教育出版社)、大学専攻用『総合日語』(北京大学出版社)、『高等院校日語專業基礎段階系列教材』(高等教育出版社)、大学専攻用『新界標日本語総合教程』(復旦大学出版社)、小学校用『小学日語教材』(遼寧少年兒童出版社)、新シラバスに準拠した中学校用『義務教育課程標準実験教科書日語』(人民教育出版社)などであった。

上述のように、中国(大陸)の日本語教材作成は1970年以來のここ30数年間、著しく発展してきた。その特徴と背景は次の三段階で整理することができよう。

#### ① 素材補強の段階(1970-80年代)

この時期に出版された教材はほとんど語彙や文章などの学習素材だけで編集されたものであった。国交正常化前は日本からの出版物がかなり制限されていたこともあり、素材の内容と日本語らしさの問題は教材の学習効果に大きな影響を及ぼし、教師の素材補強能力が重要な要素となった。そのために、国交正常化の後、日本から豊

---

<sup>5</sup> 『新編日語』(上海外語教育出版社1993-1995年)、『新編基礎日語』(上海訳文出版社1994-1995年)、『基礎日語教程』(外語教学与研究出版社1998-2001年)、『大学日語』(高等教育出版社1991-1992年)など。

富な素材を収集し教材にすることが重視され、日本で出版された教材の素材に魅かれて数種の編訳版も出版された<sup>6</sup>が、素材補強に関心が集中していて、その内容の質や指導法には関心と研究が及ばなかった。

### ②素材改善の段階（1990年代以降）

中日間の交流が各分野で盛んになるにつれて、これまで出版されていた日本語教科書の問題が表面化してきた。素材内容の時代遅れ、会話文や例文にある日本語表現の不自然さ、文法説明の「落とし穴」<sup>7</sup>や応用練習の貧弱さなど指摘されていた。この時期に教育部の外国語教学指導委員会が発足し、『教学大綱』の制定と「推薦教科書」の選定により、素材や内容の改善と指導法の配慮が求められた。また、大学日本語専攻の全国学会である中国日語教学研究会では日本語教材をテーマとした国際シンポジウムを開催し、国際交流基金の支援による教材展で中国各大学の教材と日本で出版された教材が展示されていた。そのため、教科書の多くは、素材内容の改善と文法項目の充実を図った。しかし、指導法の配慮は明確な形とならなかった。外国語教育学の理論と方法について関心と実践が不足していた当時の中国では、その研究が少なく、成果も注目されなかった<sup>8</sup>のである。

### ③素材統合の段階（2000年以降）

21世紀に入り、高等教育の大衆化と日本語学習者の急増が進み、学習ニーズの総合化と学習形態の多様化が現れてきた。多くの教科書は新版を出したりして対応を進めようとしたが、その対応は素材の新しさや内容の面白さとデザインの工夫を求める傾向が強く、教授法の進化と配慮は少なかった。そんな中で、遼寧少年児童出版社の『小学日語教材』（2002-2003年）と人民教育出版社の『義務教育

<sup>6</sup> IUCのINTEGRATED SPOKEN JAPANESE（凡人社1971年）、吉田弥寿夫他『あたらしい日本語』（学習研究社1973年）、東京外国語大学附属日本語学校の『日本語』（1980年）、文化庁の『生活日本語』（1983年）など。

<sup>7</sup> 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代（1999）など。

<sup>8</sup> 同シンポジウムでは国際交流基金の支援で岡崎敏雄著『日本語教育の教材』（アルク）が配布されたが、深く読まれるまでは長い時間が経った。

課程標準実験教科書『日語』(2003-2005年)の新しい試み<sup>9</sup>に続いて、高等教育出版社の『新大学日語』(2002-2003年)は言語活動の種類と関連に注目し読解作文篇と会話聴解篇に分けて構成され、北京大学出版社の『総合日語』(2004-2006年)は新しい文法体系を導入し、会話文の自然さと応用練習の効果を求めようと工夫されていた。また、高等教育出版社の『高等院校日語專業基礎段階系列教材』(2010-2012年)は文法中心と教師中心の教材体制を改革してトピック先行のタスク型の学習モデルが導入され、復旦大学出版社の『新界標日本語総合教程』(2013-2014年)はJFスタンダードの「Can-do Statements」を用いて学習と評価の体制を進化させようとした<sup>10</sup>。つまり、素材改善だけではなく、新しい理念の導入やシラバスの更新により、素材を異文化コミュニケーション能力の養成へと統合しようとしたものである。

このように、時代の変化と社会の発展に適するような新しい日本語教材が求められるようになり、そのための基礎研究と実践研究は中国の日本語教育の大きな課題となった。

### 3. 教材研究の現状と事例

上述のように、日本語教材の編集と使用に伴って、教材研究も様々な視点やレベルで進められてきた。特に2000年以来、教材分析は日本語専攻の大学院ゼミや修士論文の内容となり、学問的に重要視されるようになった。北京師範大学の大学院カリキュラムには初めて「日本語教科書分析」という科目が設けられ、最新の外国語教育学理論を学んで中国と日本で出版された日本語教材と英語教材の対照分析が進められていた。また、日本語教材を研究テーマにした修士論文第一号<sup>11</sup>も西安交通大学応用言語学専攻で出され、ここ50年間の中国(大陸)の日本語教育に使われた主要教科書の内容に関する

---

<sup>9</sup> 篠崎摂子・飯野令子・曾麗雲(2004)、伊月知子(2005)、唐磊(2011)

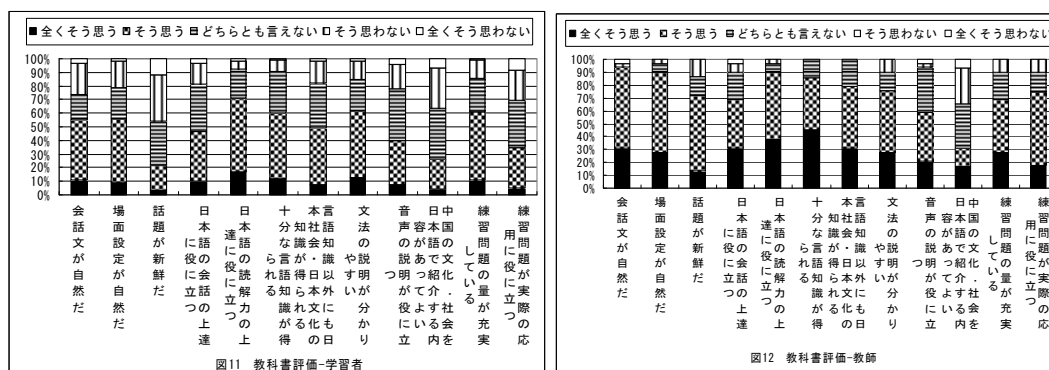
<sup>10</sup> 徐敏民(2012)

<sup>11</sup> 張文麗(2000)

調査と分析が行われた。

このような教材に関する基礎研究は中国の日本語教育研究で重要な一部分として見なされるようになった。その一例として、著者が所属する北京日本学研究中心では、中日両国の学者による共同研究プロジェクトを企画し、大学の日本語専攻で最も学習時間数の多い主幹科目「総合日本語（精読）」を対象に学習研究と教材研究を行い、論文集と教科書コーパスなどの成果物<sup>12</sup>が世に出された。教材に関しては、15篇の研究結果が論文集に収められているが、その内容は教科書の評価、素材の質と形態、語彙と文法、練習と活動など多方面にわたるものであった。

例えば、教科書の評価で冷（2006）では下図のように、学生と教師の間に差が大きいことが示された。特に、話題の新鮮さ、場面設定の自然さと会話の自然さ、練習問題の有効性に関しては、教師より学生の評価が厳しいものであった。



会話文について、教科書コーパス<sup>13</sup>による著者の調査（曹 2006）でも、表1のように場面や背景の説明不足という共通の問題が浮かんできたが、会話文で文法を教える意識が根強く残っていることがその一因と考えられよう。

<sup>12</sup> 曹大峰主編（2006）

<sup>13</sup> 日本語専攻基礎段階用の主要教科書四種（1993-2002年）を全文収録した電子コーパス。

表 1 会話文の内容に関する調査

	BD	BW	DW	SW
前文	○	△	*	○
場面説明	*	*	△	*
場所	△	△	*	△
身分関係	△	○	*	△
性別	○	○	*	*
解説	*	*	*	△
練習	○	△	△	*

○良 △弱 \*無

表 2 本文の難易度に関する調査

教材	第 2 冊	第 3 冊	第 4 冊
SW	★★	★	★★★
BD	★★	★★	★
BW	★	★★	★★★★
DW	★★	★★	★★

本文の難易度について、篠崎（2006）では表 2 のように各教科書の第 2・3・4 冊の最後の課に掲載された文章の日本語の難易度を、「リーディングチュウ太」を利用して判定した<sup>14</sup>。この結果から、教科書によって難易度が徐々に上がり、段階的な学習が考えられているもの（BW）と、難易度が変わらないもの（DW）、難易度が逆転しているもの（SW や BD）があることがわかった。各教科書の本文は必ずしも難易度によって選択・配列されていないだろうことがうかがわれる。

文法項目については、著者が助詞「に」の出し方と授受表現の「てもらう」の解説を調べたところ、やはり各教科書に差が見られた。

表 3 四種類の教材に見られる助詞「に」の用法の出し方（曹 2006）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
助詞「に」の意味用法	存在場所	帰着到達点	成立時点	間接的対象(人間)	受け手	選択決定の対象	変化結果	動作作用の結果	比較評価の基準	比例頻度の基数	目的	名目	原因理由	受動文の動作主体	使役の対象	特定の動作主体	補充説明の補語	並列・添加
SW	1-4	1-7	1-6	1-7	1-16	2-2	1-9	1-18	2-4	1-6	1-16	2-7	3-5	2-9	2-12	3-8		4-1
BD	1-5	1-2	1-9	1-10		1-10	1-5		2-3	3-9	2-3	3-6	4-9			3-1	4-13	
BW	1-11	1-6	1-7	1-7	2-15		1-8			1-7				2-11	2-12		4-11	
DW	1-14		1-16	1-17	1-18				1-23	1-22		2-1			2-13			

\*数字は出現位置、例えば 1-4 は第一冊の第四課をさす

<sup>14</sup> 表中のレベル判定は「リーディングチュウ太」によるものである。レベルの判定は文章中の日本語能力試験 3・4 級の単語が全体に占める割合により、80%以上「★とてもやさしい」、70%以上 80%未満「★★やさしい」、60%以上 70%未満「★★★ふつう」、50%以上 60%未満「★★★★すこし難しい」、50%未満「★★★★★難しい」となっている。



助詞「に」は多くの用法を持つ文法項目であり、その用法を基本的用法→拡張的用法の順序で教えていけば習得効果がいいという主張があるが、実際、教科書コーパスで見れば、表3のように各教科書では分類の細かさと出し方の順序が違っていることが観察された。

授受関係を表す「てもらう」は習得しにくい項目といわれるが、意味的には「使役的用法」と「受身的用法」<sup>15</sup>に分けて教えると効果的である。しかし、教科書コーパスで調べた結果、表4のように二つの用法に分けて適切に扱われるのが一種の教科書しかなく、他の三種は用例が一方しかない(DB)か、説明と用例が反対になっている(DW、SW) ことが分かった。

表4 「てもらう」の説明と用例に見られる教材差 表5 文法項目数の差異

	DB		BW		DW		SW	
	説明	用例	説明	用例	説明	用例	説明	用例
使役的	○		○	○		○		○
受身的	○	○	○	○	○		○	

文法項目	SW	BD	BW	DW
1級(50)	23	14	15	11
2級(218)	106	73	73	50
3級(195)	76	89	61	97
4級(268)	123	129	73	89
級外	245	292	201	163
合計	573	597	423	410

( ) 内は出題基準の項目数

各教科書の文法項目について、著者が日本語能力試験出題基準と対照してみたところ、表5のように教科書間の差が大きいばかりではなく、出題基準とのずれも全体的に目立つものであった。

また、教科書の学習語彙について、曹(2006)では動詞、副詞、形容詞に絞って調査したところ、表6のように、BDとBWの教科書間に語数の差が大きいのに気がついた。動詞、副詞、形容詞は最もよく使われる語彙として、学習者に提供される語数と頻度によって教科書の学習効果が異なってくるのだが、教科書間に見られるこの

<sup>15</sup> たとえば、床屋で顔をそってもらう(使役的)、お褒美に辞書を買ってもらった(受身的)など。

ような相違はどんな原因によるものなのか、今後さらに細かく検討していきたい。

表 6 学習語彙に見られる教材差

	BD	BW	DW	SW
形容詞	188	103	146	139
動詞	2214	1176	1345	1421
副詞	415	277	343	328

表 7 練習問題のパターンと分布

分類	練習パターン		分布 (冊)
基礎固め型	1	発音	1>2>3
	2	表記	1-2-3-4
	3	活用	1-2
	4	単語・助詞	1-2-3-4
応用型	5	文法 文型	1-2-3-4
		言換え・置換え 文完成・応答・翻訳	
	6	読解	1<2-3<4
7	タスク (ロールプレー・作文)	疎ら	

練習問題と教室活動について、趙（2006）では、教科書コーパスを利用して各教科書の練習問題を調査し、表 7 のように 7 つのパターンと二類型に分類して分析が加えられた。分類の結果から分かるように、どの教科書も基礎固め型の練習に重点を置いているのだが、それに相応した応用型の練習、特にタスク型の練習がまだ重要視されていず、コミュニケーション能力の養成には配慮が届いていないのが実状であろう。

上述の基礎研究を通して、これまでの大学日本語専攻の教科書の問題が一層明確に示唆された。それは主として次の点にあると考えられる。

- ① 話題の新鮮さ
- ② 会話の自然さ
- ③ 場面設定の明確さ
- ④ 応用練習と教室活動の重視
- ⑤ 学習項目の選定と配列の適切さ
- ⑥ 文法項目の出し方と説明の有効性

問題の性質から考えれば、①と②は素材の質、③と④は教授法、

⑤と⑥は教育方略の問題だといえるが、いれずも今後の教科書作成にとって重要な課題なのである。

#### 4. 教材開発の新しい目標と事例

これまでの中国の大学の日本語専攻では、文法中心と教師中心の教授法により授業が進められ、教材もほとんどそのためのものであった。しかし、国際化時代や多文化社会を迎え、異文化コミュニケーション能力を持つ人材が求められるようになった今日では、これまでの教授法と教材は新しいニーズに合わなくなり、多様化しつつある学習動機や学習スタイル、急増する新設学科の経験不足などに対応できるような、内容と能力を重視した新しい日本語教材が求められるようになった。

このような時代要請に応じて、中国では新しい日本語教材の作成実践と研究活動が行われているが、一例として、著者が所属する北京日本学研究中心では、中日両国の大学や教育部門の研究者の協力により、「中国の日本語教育における主幹科目『総合日本語(精読)』に関する総合研究」や「中国の日本語教育のための新しい教材像に関する研究」の成果を土台に、教育部「十一五企画」教材出版計画に採用された大学専攻用の基礎日本語シリーズ教材『高等院校日本語専攻基礎段階系列教材』の開発プロジェクトが実施された<sup>16</sup>。

上述の教材開発プロジェクトにおいて、次の目標と方針が立てられた。

- 「総合日本語」(従来の「精読」)だけではなく、「聴解」、「口語」、「作文」という多科目に使用する教材のシリーズ化によって、科目間の連携と相乗的学習効果を図り、総合的な日本語能力の養成をめざす。
- 多文化社会に実在する話題と多様性のある視点を盛り込み、大

<sup>16</sup> 著者(編集責任者)を含む中日両国16の大学・機関の62名の研究者の共同作業によって4種類で24冊のシリーズ教材が出版された。

学生の知的レベルにふさわしい内容（トピック）と教室活動（タスク）の展開により、日本語による理解力・思考力・表現力・共生能力を養成する。

- 外国語学習のプロセスとストラテジーを配慮し、科目別に適するタスクチェーンの導入によって文法中心と教師中心の教材体系を改革し、自主的で協働的・創意的・効果的な学習を促進する。
  - 最新の言語研究や教育文法研究の成果を取り入れ、漢字圏学習者向けの簡易な教育文法体系を作成し、その学習項目の配列と教え方を工夫し、日本語専攻の学生として十分な言語知識と運用力の獲得を図る。
  - 教授経験や情報の少ない教師でも本教材で教えられるように、講義用 PPT と学習語彙文法データベース、学生用単語帳と練習帳など付した教師用指導要領書と学生用付属教材を充実させる。
- 次節から、具体的にその教科書の内容と特徴を紹介し、考察を深めていきたい。

#### 4.1 主幹科目の内容と効果を根本的に改善する『基礎日本語総合教程』

中国の大学の日本語学科では、「総合日本語(精読)」という主幹科目があり、学習時間が最も長い（四年間平均毎週に 6-8 時間ほど）ので、重要な役目を果たすものとして位置づけされてきた。本シリーズ教材においても、この主幹科目で使う『基礎日本語総合教程』の教育内容と効果を重要視して、これまでの内容の問題（日本の小中学生程度の内容）と効果の問題（文法中心と教師中心で応用に向かない）を根本的に改善しようと努めた。まず、内容のほうでは、「大学生の知的レベルにふさわしい内容（トピック）」を目標に、日本を中心に中国や世界の話題を精選し、20 ユニットにして 4 冊で 60 課の内容が構成された（表 8）。

表 8 『基礎日本語総合教程』の話題構成と文法項目数

第一冊 186	UNIT1 大学生の情報交流		第三冊 165	UNIT11 外見と心	
	1 ネットミーティング	16		31 いろいろな人物描写	16
	2 中国にもありますよ	11		32 名作の中の人物描写	10
	3 いろいろな「一番」	10		33 外見と中身	11
	UNIT2 中日両国の日常生活			UNIT12 風景描写	
	4 一日のスケジュール	21		34 エンルムの春風	11
	5 交通機関と道案内	16		35 風景と信仰	11
	6 買い物の形	15		36 近江八景と瀟湘八景	10
	UNIT3 大学生生活			UNIT13 ふれあいと出会い	
	7 大学の勉強生活	13		37 いろいろなふれあい	12
	8 先輩へのインタビュー	13		38 自然とのふれあい	9
	9 アルバイトとボランティア活動	9		39 人とのふれあい	12
	UNIT4 言語学習			UNIT14 企業の今	
	10 外国語の学習法	18		40 日本のものづくり	10
	11 中国語の漢字と日本語の漢字	11		41 日本企業の中国進出について	11
12 和語、漢語、外来語のイメージ	6	42 経済のグローバル化	10		
UNIT5 趣味と嗜好		UNIT15 仕事と生き方			
13 「三種の神器」	7	43 多様な生き方	11		
14 ユニークなコレクター	12	44 仕事の現実	10		
15 サークル活動	8	45 希望の仕事につくために	11		
第二冊 174	UNIT6 動物と人間		第四冊 194	UNIT16 未来のために過去を並べる	
	16 動物との会話	12		46 さまざまなアーカイブズ	14
	17 動物への思いやり	13		47 アーカイブズに携わる人々	13
	18 動物との共存	13		48 アーカイブズの未来	14
	UNIT7 都会と田舎			UNIT17 過去の若者、今の若者	
	19 あなたは都会派?田舎派?	11		49 若きウェルテルの悩み	13
	20 私のエコライフ	11		50 決心	12
	21 住みよい社会の構築	13		51 ボランティア	12
	UNIT8 生活と健康			UNIT18 数字で納得させる	
	22 朝型人間と夜型人間	9		52 調査用紙の作成方法	15
	23 スポーツと健康	13		53 図表の利用	12
	24 保健と健康	13		54 たかが統計、されど統計	16
	UNIT9 世界遺産と現代文明			UNIT19 言葉のチカラ	
	25 地球上にある世界遺産	12		55 ネーミング	17
	26 負の遺産・無形遺産・危機遺産	11		56 漢字と漢文	14
27 消えていく世界遺産	10	57 人は言葉を作り、言葉は人を作る	9		
UNIT10 飲食と文化		UNIT20 22世紀に生まれる「人間」			
28 日本の食事と文化	10	58 ロボット工学の今	10		
29 中国の食事と文化	12	59 ロボットと人間社会	10		
30 文化の広がりとは違	11	60 ロボットと心	13		

また、新しい理念と方針による教材の教育効果を図り、カリキュラムの時間配分にそって内容の理解と応用を目標とする学習ステップを教科書に組み込み（表 9）、ステップ 1 とステップ 2 ではインプット、ステップ 3 ではインプット+アウトポット、ステップ 4 ではアウトポットという学習プロセスを明確に、インプットの内容は日本のことを中心に、アウトポットの内容は中国のことを中心にという

ように、協働的教室活動の目標を立てて、観察-発見-整理-チャレンジのタスクチェーンを通して学習者を中心とする学習活動を導くようにしている。

表 9 新しい教材に組み込まれた学習ステップの例

UNIT1 大学生間の情報交換		
第1課 ネットミーティング	第2課 中国にもありますよ	第3課 いろいろな「一番」
1. 自己紹介をしましょう 2. 相手のことを聞きましょう 3. 家族や友達を紹介しましょう 4. ネットワークを広げましょう	1. 相手国のものを知りましょう 2. 友達の所在を確認しましょう 3. 町の絵を説明しましょう 4. 大学の施設を説明しましょう	1. いろいろな「一番」を知りましょう 2. 日本の「一番」を調べましょう 3. 比較していい方を選びましょう 4. 中国や他国の「一番」を紹介しましょう

本教材では上述のように話題先行のタスク型の学習モデルを提唱しているので、文法教育に関しても、それに合わせてコミュニケーションのための教育文法を再構築しようと多数の試みを導入している。たとえば、学習項目の配列はトピックの内容に即して出現の順序を調整したり、学習目標を理解と産出の二段階に分けて設定したりすることによって、初級でも大学生の知的レベルにふさわしい学習内容に触れることができるようにしている。また、主教材に発見学習と知識整理のタスクを設定し、文法解説を指導マニュアルに移して解説内容を「基本 - 例文」と「提示 - 例文」に分け、学習者の状況によって教師が指導すべき項目と程度を選択できるようにしている。それから、自己評価機能を備えた練習帳や持ち歩きやすい単語帳をつけることによって、自主的自律的学習を支援するようにしている。これらの文法教育の方略的改革とともに、内容的にも現在日本で広く使われている欧米人学習者向けの教育文法と違って、漢字圏の教師に受容れ易い教育文法体系が導入されている。

表 10 と表 11 にはその品詞体系と活用体系が提示されているが、日本の学校文法と日本語教育文法の長所を取り入れ短所を避けるよ

うに多数の研究者による検討を通して立案されたもの<sup>17</sup>であり、また、日本語学より日本語教育学の立場に立ち、しかも漢字圏学習者向けに種々の配慮をしたものである。たとえば、動詞の分類は活用の特徴を示唆した漢字名称を受け継ぎ、助動詞は用言を補助する機能を認め、多様な形態素を包括する文法辞として学校文法の名称を受け継いでいる。活用形は用言自身の変化語形として定義の範囲を学校文法から受け継ぐが、問題となったその名称を簡略化し実際発音したり書いたりする形を名称にすることによって記憶効果を図ろうとした。また、表現形式の組み合わせによって実現する基本的な意味機能も「日本語教育文法」の成果を吸収し表に入れたものである。

表 10 教材に導入された新しい品詞体系

日本語名	名詞				動詞			形容詞		副詞			連体詞	接続詞	感動詞	指示詞	助詞					助動詞		
	普通名詞	固有名詞	代名詞	数詞	形式名詞	五段活用動詞	一段活用動詞	変格活用動詞	イ形容詞	ナ形容詞	情態副詞	程度副詞					陳述副詞	格助詞	並列助詞	提示助詞	副助詞		終助詞	接続助詞
	自立語																付属語							
中国語名	独立詞（実詞）																附属詞（虚詞）							
	名詞				動詞			形容詞		副詞			連体詞	連詞	嘆詞	指示詞	助詞					助動詞		
	普通名詞	专有名词	代詞	数量詞	形式名詞	五段变化動詞	一段变化動詞	不规则变化動詞	イ型形容詞	ナ型形容詞	情状副詞	程度副詞					陳述副詞	格助詞	並列助詞	提示助詞	副助詞		语气助詞	接続助詞
① 品詞は形式と意味の特性からまず大きく二分する。 ② 基本的には9種類とし、種類を跨る「指示詞」は別類とする。 ③ 助動詞は学習の便宜上、付属語として次の多様な形態素を含む。a. 用言の「複語尾」や接辞にあたるもの(た、う/よう、まい、ない、ぬ(ん)、れる/られる、せる/させる、ます、たい/たがる) ; b. 「判定詞」や複合辞にあたるもの(だ、です、である、そうだ(様態)、そうだ(伝聞)、ようだ、みたいだ、らしい、かもしれない、のだ、はずだ、わけだ、べきだ、ものだ、つもりだ)。																								

<sup>17</sup> プロジェクトチームの会議や高等教育出版社主催と人民教育出版社主催の日本語教育文法フォーラムなどにおける諸氏の発表と参加者のコメントを踏まえて数々の修正を経て立案されたものである。

表 11 教材に導入された新しい活用体系

活用形	イ形容詞										ナ形容詞										動詞															
	基本形					変化形					基本形					変化形					基本形					変化形										
	い形	かつ形	かう形	く形	けれ形	だ形	詞干	だっ形	だろ形	で形	なら形	に形	う五段形	あ段形	い段形	(音便形)	お段形	え段形	う一段形	い/え段形	え段形	う五段形	あ段形	い段形	(音便形)	お段形	え段形	う一段形	い/え段形	え段形						
表現形式																																				
接辞・形態素		です	たり	う、	て	ない	ば																													
文法機能	連体修飾	丁寧体終止	過去	例示	推し	中止	並列	接続	否定	仮定	普通体終止	丁寧体終止	過去	例示	推し	中止	並列	接続	否定	仮定	連体修飾	普通体終止	連体修飾	普通体終止	連体修飾	普通体終止	丁寧体終止	過去/完了	接続	例示並列	意向	命令	仮定			
説明	① 学校文法の活用体系の短所（活用形の名称の問題）を補い、長所（音韻規則の配慮）を生かすために、形式優先の活用形名を新規導入する。 ② 「日本語教育文法」の長所を生かして、意味・機能を持つ表現形式を軸に、活用体系を整理する。 ③ 活用形は用言自身の語形と定義し、意味・機能を持つ表現形式の基本構成要素（語基）として、「日本語教育文法」の取り扱いと区別する。 ④ 文における表現形式とその意味機能を中心に説明するのが大事、例：受身の表現形式 五段動詞あ段形+助動詞「れる」、一段動詞い/え段形+助動詞「られる」。仮定の表現形式 五段動詞え段形+接続助詞「ば」、一段動詞え段れ形+接続助詞「ば」、イ形容詞けれ形+接続助詞「ば」、ナ形容詞なら形直接。																																			

## 4.2 言語活動の特徴と相乗的学習を配慮した技能別教材

本シリーズ教材では、主幹科目の教科書と並んで、聴解、会話、作文などの科目の教科書も同時に開発し、技能別の言語活動の特徴と相乗的学習効果を配慮するようにしている。

### 4.2.1 聴解ストラテジーを体験的に学習できる『基礎日語聴解教程』

日本語能力試験（JLPT）の結果統計によれば、漢字圏学習者の聴解得点は欧米系学習者に比べて低いことが目立つ。それは象形文字のおかげで視覚による学習能力が強い代わりに、聴覚による学習能力が弱いことを示唆しているのかもしれないが、漢字圏学習者への聴解教育は聴覚による学習能力とコミュニケーション能力を育てることが重要な課題であるに違いない。そこで、本シリーズ教材では、『基礎日語総合教程』と並行的に使用できる『基礎日語聴解教程』を開発し、上述のシリーズ教材の理念と聴解教育の課題を踏まえ、従来の教科書に明確に見られなかった聴解ストラテジーをタスクによって全面的に提示し、聴解活動を通して能率的に情報を受容し異



文化コミュニケーションを実現する能力を育てようという目標が立てられたのである。

具体的には、聞く活動を人間のコミュニケーション活動の一環として位置づけるように、「前作業（聞く前）-本作業（聞く時）-後作業（聞いた後）」という学習プロセスが導入されているが、前作業ではウォーミングアップ活動で既習知識の活性化を図り、本作業では7つの聞き取りタスクを通して聴解ストラテジーの体験を積み重ね、後作業では内容の復習や補足をした上に、応用タスクをすることによって、聴解の質と効果を高めようとしている。

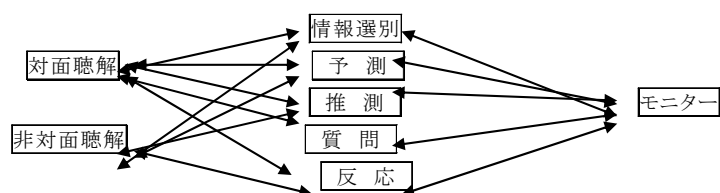
また、『基礎日本語総合教程』に近い内容と話題を数週間遅れて取り上げ、相乗的学習を促進しようとしている。たとえば、第1課から第4課までは『基礎日本語総合教程』の発音篇に後続し日本語の発音を聞く能力を習得させるようにしている。また、第5課から第7課までは『基礎日本語総合教程』の第1UNITに関連させて次のような学習目標を立てている。

表 12 『基礎日本語聴解教程』の各課に見られる学習目標

第5課 自己紹介	第6課 私の家族	第7課 友達
1. 名前・所属・学年・趣味を聞いて理解する	1. 家族の形態・人数・職業・呼称を聞いて理解する	1. 友達の外見・性格・趣味などを聞いて理解する
2. 「事前予測」ストラテジーを体験する	2. 「情報選別」のストラテジーを体験する	2. 「後続予測」ストラテジーを体験する
3. シャドーイングを体験し、日本語の自然なリズムとイントネーションを身につける	3. シャドーイングを体験し、日本語の自然なリズムとイントネーションを身につける	3. シャドーイングを体験し、日本語の自然なリズムとイントネーションを身につける

本教材で体験させる聴解活動とストラテジーは基本的に次のように二つの種類と5つのパターンとそれらをコントロールする「モニター」のタイプがある<sup>18</sup>が、各パターンにおいては多数の目的と場面による聞き取りタスクを導入したものである。

<sup>18</sup> 国際交流基金『聞くことを教える』（横山紀子著）に負うところが大きい。



#### 4.2.2 口頭表現の場面と行動をモニターする『基礎日語口語教程』

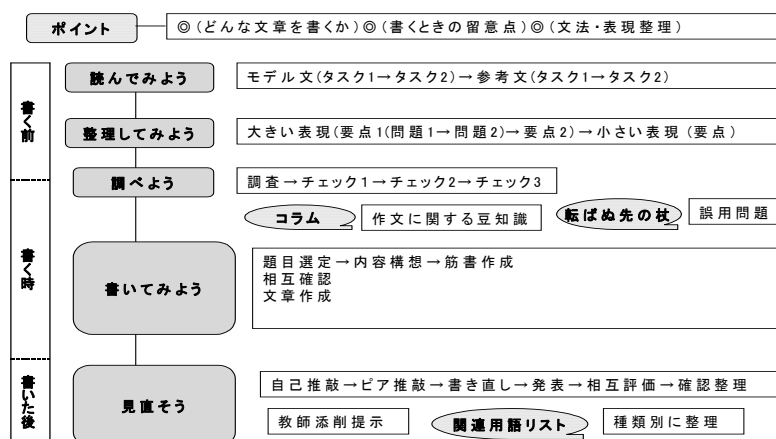
これまでの会話教材は内容的には場面と文脈の提示が不足しており、学習のプロセスが十分に配慮されていなかった。それで日本語環境が薄い中国の日本語教育の現場では、できるだけ日本人教師に授業をお願いすることによって教材の不足と中国人教員の及ばない点を補うようにしている。しかし、近年急に増えてきた地方大学の新設学科では、すぐに日本人教師が見つかるとは限らず、見つかったとしても長期的に教職をお願いできる保証もないので、中国人教員でも効果的に教えられる会話教材が地方の大学から強く求められているのである。

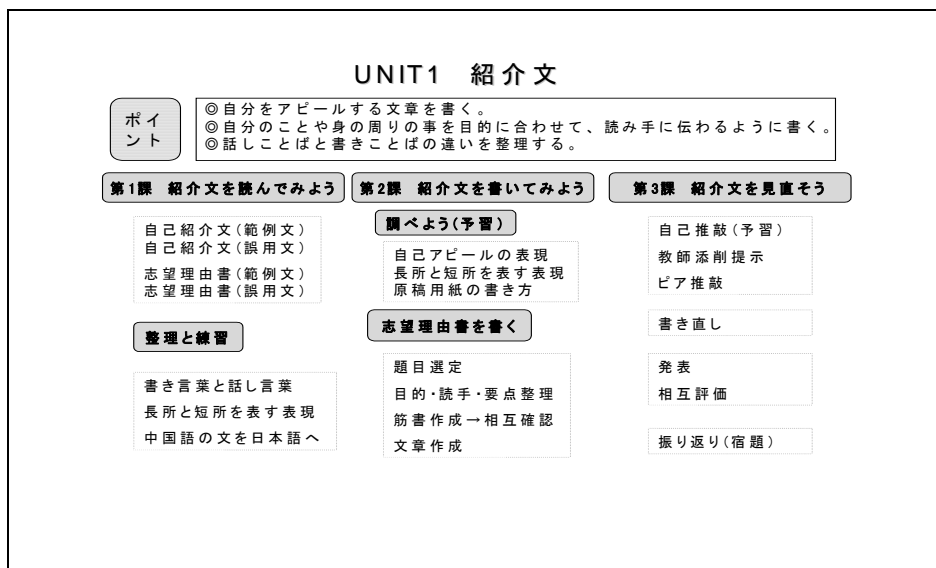
そこで、本教材は、なるべく実際の口頭表現の場面と行動をモニターするように、使用場面に結びついた談話や対話を学習内容に盛り込み、文脈を含んだ口頭表現のパターンの発見・整理・応用という協働的学習活動を中心に、「試し→確認→補足→練習→発表→実践」という学習プロセスの導入を工夫し、中国人教師が使いやすく漢字圏学習者が応用しやすい会話教材をめざして開発されている。また、科目間の連携をはかり、『基礎日語総合教程』より一学期遅れてスタートする第一冊では、学校や日常生活という既習の話題を中心に話す活動をより深く展開する構成となっているが、『基礎日語総合教程』の第三冊と並行する第二冊では、会議やコンテスト及び儀式などフォーマルな場面の話す活動を中心に、思考力と伝達・応対力の連結を図る学習形態を提示するようになっている。

#### 4.2.3 自然な文章表現力の養成をめざす『基礎日本語写作教程』

最近中国の大学で毎年のように実施される日本語専攻四級試験では、作文問題の得点が平均的に低くて大学別の得点差が最も著しいものである。これは作文教育への認識不足と大学間の教育レベルの不均衡によるものと考えられているが、具体的には、科目間の連携不足と教材における学習プロセスの欠陥に大きく関わるものと認識することができよう。そこで、本シリーズ教材では、『基礎日本語総合教程』にある書く活動と関連しながらも、より集約的に自然な文章表現力を養成する『基礎日本語写作教程』が2冊ほど開発された。

本教材では、人間の文章表現活動の一般的過程をモニターして、「書く前→書く時→書いた後」という活動プロセス（図1）にそって、教材のUNITと課を構築し（図2）、異文化理解を基礎とした自然な文章表現力の養成をめざそうとしている。また、図2のように、同シリーズ教材の『基礎日本語総合教程』、『基礎日本語聴解教程』と『基礎日本語口語教程』に続いて、作文教材でも紹介文を取り上げ、相乗的協働的な学びを実現しようとしている。





## 5. まとめと今後の課題

本稿では教材開発という日本語教育の重要課題に関して、中国における日本語教材編集と使用の歴史と20世紀70年代以来の中国大陸の状況を考察し、最近の教材研究と教材開発の事例を踏まえて海外の日本語学習環境における教材開発の理念・方法と課題を論述した。

特に、多文化理解に役立つ学習内容の盛り込み、異文化コミュニケーション能力・主体的学習運用能力・独自の総合的思考能力を含む「行動能力」の重視、学習プロセスを配慮したタスクチェーンの設計、漢字圏学習者に適する文法体系の再構築など、広く日本語教師と研究者が共に関心を持つ課題に関して、中国(大陸)での研究と実践の事例を提示した。これらの課題の遂行とその背景にある教材観と教育観の進化には長い時間と弛まぬ努力が必要であるが、今後は外国語教育学と日本語教育研究の進展によってさらなる発展と新しい成果が期待されるものである。

## 参考文献

- 伊月知子(2005) 中国における日本語教育—全日制義務教育日本語課程標準(実験稿)の特徴と教科書に見られる新しい試み 『今治明德短期大学研究紀要』第29号
- 岡崎敏雄(1991)『日本語教育の教材』アルク
- 汪向荣(1991)『清国お雇い日本人』朝日新聞社
- 国際交流基金(2008)『聞くことを教える』ひつじ書房
- 篠崎摂子(2006)「精読教材の本文について」《日语教学与教材创新研究》高等教育出版社
- 篠崎摂子・飯野令子・曾麗雲(2004)「中国遼寧省の小学生用日本語教材制作について—海外での日本語教材制作のあり方—」『国際交流基金日本語国際センター紀要』14
- 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代(1999)『日本語教科書の落とし穴』アルク
- 徐一平・篠崎摂子(2005)「各国の日本語教育 中国」『新版日本語教育事典』大修館書店
- 徐敏民(1996)『戦前中国における日本語教育』エムテイ出版
- 徐敏民・丸山千歌(2012)「新しい日本語教材開発の中日協働プロジェクト—Can-do Statements を用いた教材開発—」《新時代的世界日本語教育研究》高等教育出版社
- 曹大峰(2008)「中国における日本語教科書作成 一歩み・現状・課題—」『言語文化と日本語教育』35号 お茶の水女子大学人間文化研究科
- 曹大峰(2011)「内容と能力を重視した日本語教育へ向けて—中国語母語話者向けの新しい日本語教材の開発研究事例」『日本語／日本語教育研究』[2] 日本語／日本語教育研究会 ココ出版
- 趙華敏(2006)「基礎段階用日本語教科書における練習問題について」《日语教学与教材创新研究》高等教育出版社

- 曹大峰主編（2006）《日语教学与教材创新研究》高等教育出版社
- 曹大峰（2006）「日语精读课教材语料库的构建与应用研究」《日语教学与教材创新研究》高等教育出版社
- 冷丽敏（2006）「关于“综合日语(精读)”的认识调查—学生与教师之比较—」《日语教学与教材创新研究》高等教育出版社
- 唐 磊（2011）中国基础教育日语课程改革发展综述——课程标准及教科书的研制 《日语学习与研究》3
- 張文麗（2000）「西安交通大学碩士學位論文」